

新 歌人群像

川田 順

老いらくの成就

晋樹隆彦

三つの伝説

世にいわれる「老いらくの恋」で知られる歌人、川田順かわたじゆんには、八十五年の生涯に伝説が三つあると思われる。

一つは、明治三十九（一九〇六）年、順の二十五歳の折に同じ竹柏会の歌人であった徳川慶喜の五女国子を知り、恋に溺れたことである。順が後に「葵あおいの女」とみずから名づけた女性であり、国子への慕情は、「伎藝ぎげい天」（大正七年・竹柏会）、「陽炎」（大正十年・竹柏会）に収められている。

恋すべき二人ならぬを花蔭に夕月夜ま
で残りけるかな 「陽炎」

はなれ島冬の日うすき岩かげに住む心
地しぬ十日逢はねば 同

君が歩みたどどしけれ春深き磯の匂
ひにむせびて行きぬ 「伎藝天」

交わりは明治四十四（一九一）年に一度途絶えたが、大正十三（一九二四）年より復活して昭和十二（一九三七）年までおよんだという。和子夫人との結婚の間も、住友在籍中も合わせて約二十年ちかくもつづいていたことになる。



順37歳、『伎藝天』出版の頃

二つめはもちろん、六十五歳の折に出会った人妻鈴鹿俊子との劇的な恋愛愛であろう。「東帰」（昭和二十七年・長谷川書房）に、「裸心」と題された二十六首は、本稿の末尾に抄出するがその代表的な相聞歌である。

三つめは、俊子との恋愛の末の苦悶による京都東山の自身の寿塔の前での自決未遂事件である。厳格な家柄の子として育ったゆえの倫理観といていいが、自己批判への激しい人生観の末の懊悩である。

昭和二十六（一九五二）年に刊行された川田順の『住友回想記』（中央公論社）は、川田の住友本社での三十年にわたる仕事のことどもや社内外の交遊録が、銜いなく述べられている実録読物である。その後半の、某財界

人からの読後の感想を載せている個所を引く。

「住友回想記は毎回面白く読んだ。財閥の気風とか品格とかいったものが臚げながら拙者達にもわかった心持がする。ただ一つ物足らぬのは、筆者自身の影が薄い。ひどく遠慮してゐるやうに思はれる。」

筆者もその通りだと思った。エスカレーターを昇るように、すすいと住友の重役の地位を駆けのぼった川田順が、それほど仕事の手柄話を語るわけでもなく、周囲との摩擦をおおげさに記すのでもない。たんたんと先人や後輩の人物や能力について語り、常に川田本人は冷静に状況を横から（下からといつてもいい）見ているのである。川田順の社会人としてのモラリステイックな姿勢、人間としての柔和な感性のもたらしたものであろう。

写真で見る剛直な風貌とは異なる、心やさしく順直、人を押しつけてまで出世するタイプでないこと、文学者としてのエゴをいつも心の内ふかく押さえていたタイプではなかっただろうか。理由はどこに潜んでいたのであらう。

出生の影と歌の道

明治十五（一八八二）年一月十五日、川田

順は東京下町の三味線堀の祖母の家に生れた。

父、川田剛は漢文学の泰斗としての令名高い人で、号は甕江。宮内省の官吏として諸陵の頭（りょうのかみ）の要職を務め、大正天皇東宮時代の侍講でもあり、また、教育勅語文案起草者としても知られていた。順が、家父長的な家庭環境の元で幼少年時代を過ごしたことがうかがわれる。後年、重役の職につきながらも自我を極力押さえていた直接の理由とはならないにせよ、間接的に左右したであろうことは十分うかがえるのである。

三男であったが、生母は側室で、浅草蔵前の商家の娘で本多かねといった。生母と妹と順は根岸の別荘に住いをかまえ、生母の病死後の明治二十六（一八九三）年に牛込の父の本邸へ引きとられたという。順十二歳の時であった。

父、甕江はその三年後に六十七歳で逝去。その年、嫡母の許しを得て、竹柏園の佐佐木信綱の高弟安藤直方に短歌の手ほどきをしてもらったという。

翌、明治三十（一八九七）年、順は城北中学の十六歳の時に佐佐木信綱に入門した。「心の花」創刊一年前、島崎藤村の『若菜集』が一世を風靡した近代の夜明けの時代である。竹柏園には既にそうそうたる才媛がひしめ



神奈川県・辻堂の自宅前で俊子夫人と（1955年頃）

吉野山ひとむら深く霞めるや大みささぎのあたりなるらむ

は、十七歳の折の作でありながら、大きな風景を直截にとらえた一首であろう。もう一首、

集中で目につく作がある。

ちちこ草ははこ草枯れし冬の野のみなしこ草のわが身なりけり

妾妻の子として逃がれることのできない運命は、順の心奥に幼い頃から淋しい影を宿していたのである。短歌への道を志した原点といてもいいし、表現を志すものの宿命の影だといってもいい。出生のもたらしたその陰影こそ、後に実業界の大物として、歌人としての躍動への波瀾にとんだエネルギーを生ませたのだといっている。

明治四十（一九〇七）年、順は東大法科を卒業し、八月、大阪に移り住友総本店に入社、下宿生活を余儀なくされる。初任給は四十円、実業家川田順二十六歳の出発であった。以降十年は短歌とも離れ、竹柏園とも遠のき、住友でスピード出世の道を歩みはじめる。

結婚はその三年後、夫人は文学や短歌に理解を持たず、家庭生活はかならずしも順風満帆とはいえなかつたらしい。

旅と風土への関心

短歌への情念をふたたび蘇らせたのは、住友入社後十一年を経ている。ブランクが実業

界の仕事の忙しさに抱えるものであることはいうまでもない。しかし仕事の関係で、順はさまざまな土地を巡る機会を持った。見るもの触れるもの、文学者の目や心を揺り動かさなはずはない。

その結晶が三十七歳の折の『伎藝天』であった。榛名、土浦、佐原、近畿地方、さらに上海、北京など各地をめぐった作品が頻出する。

三十路来ぬ目のきはみ青葉かさなりて
きららきららと日の光るかも

寧楽へいざ伎藝天女のおん目見になが
めあこがれ生き死なむかも

奈良山を草萩ふみてよちゆけば頭のそ
らはあくまでも青し

主に日本各地の風土への探索を通して、歌人としての位置を確立せんとした一冊である。やがてその写真描写の手法は、歌人としての地位を不動のものとした『鶯』（昭和十五年・創元社）に引きつがれていった。

『鶯』における「立山」の連作は、旅の歌で多く占められる集中の頂点となる。

朝間にて郭公鳥の聲多したかやまは
らの樹の木群に



『伎藝天』の歌碑除幕式で。左より山口誓子、前川佐美雄、順、吉井勇 (1957年)

立山は荒き岩山岩の秀ほに石積みあげて
祠ほくら据たえたり

山の上へのしじまは深くおきろなし眼の
前の岩かきろひに陽炎立ひつも

立山が後うしろたて立山たてに影うつす夕日の時の
大きしづかさ

立山に棲むとは聞きし大鷲の目交にし
て飛びたつを見き

一連は昭和十一（一九三六）年七月下旬に作られたものである。昭和十一年といえ、二月に二・二六事件が勃発した年、また、その年の五月に順が住友を辞して実業界から突如引退した年でもある。五十五歳の時であった。辞職の理由は不明である。当時、住友の社員として働いていた源氏鶏太のことを引こう。

「当時私たち住友に勤めている人間にとつて全く寝耳に水と聞いていい大事件であった」（『短歌』昭和四十一年四月号）

理由はさておき激務の実業界を去り、プロの歌人の出立を告げた一冊のように思われる。立山をはじめ万里長城、鳥海山など主に和子夫人との十余回の旅行詠を中心としたものであるが、夫人は、肇国聖蹟の巡拝を共にした後、三週間目に発病、五十三歳で逝去した。住友を退社した順は、次々と中世の歌集や歌人の研究書を発表した。『全註金槐和歌集』（昭和十二年・富山房）、『源實朝』（昭和十三年・厚生閣）、『西行』（昭和十四年・創元社）などである。

『東帰』の相聞歌

昭和二十三年（一九四八）年十二月四日、六

十六歳の川田順は、元京都大学教授、中川与之助夫人俊子と恋愛の末に自殺を図った。未遂に終わったものの社会に大きな衝撃を与えた。

その顛末についてのエピソードは省く。しかし、俊子夫人との相聞を綴った『東帰』は、六十代の調べとは思えぬほどのみずみずしさにあふれている。「裸心」より。

夏山よるの夜の青さに見惚れ居りそのふもとには君が家あり

吾が髪の白きに恥づるいとまなし潮るるばかり愛かなしきものを

山家集に一首すぐれし恋のうた君に見せむと朶しをりを挿む

むらさきの日傘すぼめてあがり来し君をし見れば襟あしの汗

ぬばたまの黒髪匂ふ佳き人に魅入られながらわれ老いむとす

老いを熟知して、なおはばかりらず愛を遂げんとする強靱な精神、一度は死を覚悟した歌人の究極の抵抗であった。

（しんじゅ・たかひこ「心の花」選者）